

書評・新刊紹介

W・A・グロートス著、寺出道雄譯

『中國の地方都市における信仰の實態——宣化市の

宗教建造物全調査——』（五月書房、一九九三年刊）

蜂 屋 邦 夫

本書はW・A・グロートス(Willem A. Groote)氏を

中心とする三人のメンバーが、一九四八年八月に行なった宣化市内の宗教建造物についての調査報告である。四八年といえは中華人民共和國成立の前夜であり、治安面でも不安定な状況であったであろう。その時期にこれだけの調査を行なったメンバーの苦勞は並大抵ではなかったであろうし、その調査結果を九三年三月付けで出版したことに、資料の整理と保存の面だけでも多大の努力が必要であったことと思われる。半世紀も前の地方都市の宗教の状況な

『中國の地方都市における信仰の實態』

ど、この調査がなければ知りようのないことであり、何はともあれ、まず著者の努力に對して敬意を表し、成果が出版されたことを喜ぶたい。

書名には「信仰の實態」とあるが、内容は副題にあるように建造物や像、金石など「物」についての調査であり、佛僧や道士については人数程度の言及があるだけである。評者が行なってきた調査は中國じゅうを移動しながら、道士についてもできるだけ考慮したものであり、したがって本書は、いろいろな點で評者の調査の對極にあるようなも

のである。それだけに評者にとっては個人的にもたいへんおもしろく、啓發されるところが多い。

本書の中心をなす調査は八月の酷暑の最中に行なわれたものであり、當時三〇歳臺後半の著者にしてはじめて可能であったことであろう。現地調査は文獻研究とは根本的に性質の異なるもので、知力のほかに體力や氣力、社會情勢の判斷から社交性、そのほかさまざまなことが要求されることなのである。

一 本書の體裁など

本書は一九九三年三月一八日發行、A五版、總二〇〇頁、定價九八〇〇圓。

本書の構成について。序、第一部、第二部、付の、四部分より成り立つ。序の前に南門の守護神ほか七葉の寫眞、序の後に宣化市内廟宇圖、廟名一覽表、主要引用文獻一覽がつく。第一部は本書の出版にあたって新たに書かれたもの、第二部は本書の中心をなす調査報告、付には「華北農村三つの調査」として大同、萬全、宣化の農村部の調査結

果などが簡単に記されている。本文中に五十八葉の寫眞、若干の圖と表がある。

調査の經過について。著者は一九三九年から四八年まで中國に在任し、その間、四一年六月から四三年三月まで山西省大同市南東五〇キロの西冊田という村に住んだ。その時期に周邊一四一カ村の言語地理學的な調査を行ない、調査の過程で村落の宗教生活についても關心を抱き、廟宇の統計などについて若干の成果を出した。その後は宗教調査が主體となったもようで、萬全農村部については四七年七月と八月に調査し、宣化農村部については四八年七月と八月に調査した。そして四八年八月に本書の主要部分をなす宣化市内の調査を行なったわけである。

調査のメンバーは著者を含めて三名で、當時、北京輔仁大學方言地理學研究室に所屬した。すなわち著者（中國名：賀登松）および李世瑜、王輔世の三氏で、本書出版時點でそれぞれ日本の國立國語研究所、中國の天津歷史宗教學研究所、中國社會科學院民族研究所の研究員である。著者には華北農村部の三カ村調査について論文があるが、萬全に

ついては李世瑜、張冀文の兩氏、宣化については李世瑜、王輔世の兩氏の協力によったという。

本書にはメルギーの INSTITUT BELGE DES HAUTES ETUDES CHINOISES から MELANGES CHINOIS ET BOUDDHIQUES の第二十六巻と THE SANCTUARIES IN A NORTHCHINA CITY A complete survey of the cultic buildings in the city of Hsuan-hua (Chahar) の書名で英語版(縦二五・三センチ×横一六・四センチ、總二四五頁)が一九九五年に出されている。これには日本語版はない索引があり、補論として「眞武神の傳説―萬全・宣化兩縣における傳承―」が付載されている。この補論は *Folklore Studies* (卷十一、東京、一九五二年)に掲載されたものである。英語版の漢字によって日本語版の誤植が訂正できるところがある。前記の調査者の身分については英語版に據った。

二 本書の内容

宣化は北京から一三〇キロ西北にある小都市で、當時の

『中國の地方都市における信仰の實態』

人口は一萬五千であった。現在は河北省に含まれるが、當時は察哈爾省に屬していた。著者らは、その都市内のあらゆる宗教建造物を訪れて調査をしたといい、位置不明の五廟を含めて廟名一覽には二〇五の名稱が挙げられている。(ただし、三三頁に見える著者の數字では、廟の總數一九八、そのうち廢墟三六、無人一〇六、なんらかの形で利用されているもの五六である。)

第一部は「宣化市の宗教の特徴」という題である。第一節「宗教單位」以下、十三の節が並ぶ。宗教單位とは著者の造語で、「祠、像、牌など、何らかの信仰の對象とされる獨立の存在を敷えたもの」という。たとえば、ある觀音堂には殿宇としては觀音廟と關帝殿の二つ、像としては觀音、關帝、靈官、韋馱の四つ、木牌には三清と眞武の二つがあり、宗教單位は八つになる。觀音像は普賢と文殊の像を伴っているが、それらは侍者であるから宗教單位としては數えないという。

だが、廟宇や位牌などを宗教單位として數の上で合計し、宣化市の宗教單位は四百三十四だといってみても、そ

の數字にはあまり意味はない。それより廟宇や像など個々の項目の實數を提示する方が重要であり、四六頁以下の「宗教別宗教單位一覽表」も、じつはそうになっている。したがって、讀者とすれば宗教單位という用語にこだわらない方がよいであろう。

また、評者の經驗から言えば、金童や玉女などの純然たる協侍は別として、普賢や文殊のように名の分かる像は、著者の用語を使えば、宗教單位として數えた方がよいと思う。三清や三官も像としての宗教單位を一として數えているようであるが、これらもそれぞれ三とした方が正確であろう。道觀によつては特殊な三清の並べ方をしていたり、元始天尊や天官の像しかない所などもあるからである。ただ、宣化市の場合は、そうした紛れはなかったのである。

第二節は「宗教の混淆と宗教別區分」について考察している。「宗教單位を宗教別に區分することは、大變困難な問題であつた」とあるが、それはその通りであろう。たとえば觀音について「觀音信仰を佛教に分類することそのも

のは妥當だとしても、宣化においては觀音は、誕生、育兒、子供の病の治癒を司る民間信仰の神々といつしよに祀られていることが多い」というが、これは宣化に限らず、中國じゅうで普通に見られる狀況である。觀音はもちろん佛教信仰の對象であるが、同時に道教あるいは民間信仰の對象でもある。これをどこかに一つに分類することは、かえつて實情にそぐわない。

著者は道教について一定の基準をたてたり、龍王や財神、五嶽神、藥王などについても苦心して分類しているが、これらは、どのように分類してもすっきりしない問題である。評者が分類すれば、ある程度別なものになる。ともあれ本書は、著者苦心の基準によつて、佛教、儒教、道教、民間信仰の四つに分類され、その分類にそつて整理されているが、それを尊重しつつ、不都合だと思えば讀者は自分の分類方法によつて整理し直せばよい。本書の資料の提示の仕方は極めて明晰であるから、別な整理はいくらでも可能である。そうした資料の提示に仕方に本書の價值があると考えたい。

なお、二七頁の注記に「禪宗とは全く無縁の關帝像が黃檗宗の信仰と共に日本に招來された」ことに言及しているが、道教が關帝を道觀の守護神として取り込んだように、佛教もまた關帝を佛寺の伽藍神として取り込んでいる。その意味では關帝は佛教の神格でもある。

以下「市内に一つの廟しかないもの」「廟宇の歴史」「廟宇に住む人」「子供の守護神」「なぜ觀音は北向きか」「胡都神とは何か」「三身佛と三尊像」「舞臺について」「鐘樓と鼓樓」「敕封された神と別稱」「覽表」「宗教別宗教單位」「覽表」の順で考察されている。

このうち廟宇の住人については、十廟に十二人の佛僧、四廟に六人の尼僧、五廟に八人の道士、一廟に二人の道姑が記録されている。だいたい一廟に一人か二人で、現在の地方の小道觀などの狀況と變わらない。廟の數から考えると微々たる人數であり、宗教が消滅する寸前の狀況が讀みとれる。ただ、佛僧や道士の宗派ぐらいいでも聞いてあれば記録の價值はずっと増したと思うが、それは實際にその場にはいないものなだりであろう。ただ、道姑がいる

點から考えると、當地の道教は全眞教であつたと思われる。また、廟に一般の家族が住んでいたり、學校など別の用途に轉用されている狀況も記されているが、それは現在の狀況と大差ない。

觀音については、評者の調査では北向きを意識したこととはなかったが、宣化では大部分が北向きで、その理由を冥界の罪人を濟度するためと推定している點がおもしろい。胡都神という神については評者は知らなかったが、蒙古語の神聖の意味と結びつけて考察している點は本章の白眉である。

最後に、宗教別に宗教單位の數を一覽表にして示してあるが、すでに述べたように儒佛道三教と民間信仰の分類については、あまり嚴密に考える必要はないであろう。その點は、第二部についても同様である。

第二部は「宣化市の廟宇の現状」の題で、本書の中心部分である。廟を佛教、儒教、道教、民間信仰の四つに分類し、それぞれの廟の名稱、市内の位置、建物、像、付屬像（位牌など）、畫像、金石（石碑、鐘、磬）、奉納物などを調査

項目とし、それに『大明一統志』などから必要部分を轉載した資料が付記されている。

記録は中國語で行ない、毎晩、各自のノートの副本を作成したという。そのことから考えると調査は分擔して行なつたと思われるが、具體的な調査狀況は不明である。廢墟になつてゐるものや無人の廟も調査對象に含まれるから、廟によつて記録に繁簡があるのはやむを得ない。廢廟の記録などは價值がないと思う人がいるかもしれないが、他の用途に轉用されてゐる廟も含めて、すべて實態の一部である。

また、調査の困難さを示す記述が、わずかではあるが含まれてゐる。七六頁には、眞武廟の觀音堂について「警察署長が扉を開けるのを拒んだため」に千手觀音の銅像があること以外は不明であること、八一頁には、海潮庵について「堂内と境内の一部は、内戦のため墓地に葬れなかつた死者の棺でうまつてゐる。棺の半分あまりは破損し、綠色の蠅のたかつた腐亂死體のため、庵内の空氣は呼吸しがたいほどである」こと、一五四頁には、眞武廟について「國

民黨軍が見張り臺として使用してゐる。二つの鐘は詳細には調査困難である」こと、一五八頁には、龍王廟について「低い壁の後方に小さな建物。門は閉じられ、鄰家の住民も廟名を知るのみ」であること、などが記されている。評者の経験から言つても、實際には、きつとさまざまな困難があつたに違いない。

金石文や建物に記された文字については、評者はできるだけ多くの寫眞を撮り、歸國後に文字起こしをしたが、著者たちはその場で記録したようである。寫眞ではどうしても不明個所が出てくるから、著者たちの方法が望ましいが、現場で記録すれば時間がかかり、調査者の體調や轉記ミスなどの問題もあり、なかなか難しい。そのためであらうか、本書の原文資料の分量はわずかである。ただ、寫眞は現在でこそ簡単に利用できるが、當時ははるかにコストがかかつたであらうから、その點では現在の調査者の方が恵まれている。ただし、本書には像や殿宇について所要所に寫眞が付されており、それらは半世紀前のものとは信じられないほど鮮明である。

佛教については佛殿（寺の意味）、観音（観音寺など）、庵（庵の名稱を持つもの）、地藏（九華觀など）、彌勒（彌勒寺など）、彌陀（彌陀寺など）、藥王（藥王廟など）について、それらが本堂となっている寺廟があげられている。また、それぞれに本堂の本尊となっているもの以外の像の所在が付記されており、それは他の宗教の場合も同様である。

細かいことになるが、普陀寺について「萬曆三十一年に尼僧のいる庵であったことは觀音および泰山信仰の存在から判る」とあるが、なぜそう言えるのか不明である。「現在は道士が居住している」とあり、かつてはそうした状況が普通に見られたと思われる。今は佛僧が道觀に、道士が佛寺に住むことはほとんどない。

儒教については文廟、武廟、城隍、三教、五嶽、東嶽、相國（清初の楊維禱を祀った廟）があげられている。そのうち東嶽廟は「全ての建物が現存する廟宇としては宣化市最大の廟」であり、かつては回廊に七十五冥司像があったという。冥司像については評者は河南嵩山の中嶽廟の回廊にずらりと並べられていたのを見ただけであるが、かつては

中國じゅうの東嶽廟などに並べられていたのであろう。現在には文革中に破壊された東嶽廟が再建されているところもあり、民衆レベルではなお冥界神の信仰が根強いようである。

さて道教については、老子、玉皇、道士觀、三清、三官、靈官、三靈、文昌、奎星、呂祖があげられている。老子とは太清宮のことで、老子像の他に四天師、二靈官があるというが、残念ながら名稱は不明である。玉皇は玉皇廟など四廟である。像としては玉皇や眞武、『封神演義』に由來する殷洪などの他、能蛟や能巖などの見慣れぬ神名が見える。詳しく研究すれば當地の特色が抽出できるかもしれない。道士觀は朝玄觀、三清は三清宮のことで、すでに廢墟である。三官は三官廟など四廟、靈官は靈官廟など二廟である。三靈は三靈侯だとあるが、不詳である。文昌は文昌祠、奎星は奎星閣など二廟、呂祖は呂祖廟である。以上、情報量はそれほど多くない。

評者の経験では、呂祖を醫術と結びつけて祀ってあるところはなかったように思うが、呂祖廟には十名醫の像と畫

像があり、「醫者として著名であった呂祖」(二八頁)という説明もうなづける。ただし、かつて民衆が病氣になったときには寺觀にでかけて神佛に祈ったことも多かったのであるから、神佛はだいたい醫者の役をしていたわけではある。なお、一二一頁の呂祖の名稱「敕封變元賢運演正驚化學佑帝君」の驚と學は警と孚の轉記ミスであろう。英語版も同様である。

民間信仰としては、五道、關帝、眞武、龍王、奶奶廟、眼光、財神、馬王、胡都、竈王、火神、虫王、狼神、風神があげられている。本書の特色の一つはこうした民間信仰の對象が丁寧な調査されているところにある。

評者の調査では五道神に出會ったことはないが、本書によれば「天の戸籍役場」としての五道廟は宣化市内の至る所にあつたという。一覽表には六六廟があげられている。像の祀り方から、土地神を中心とする河北様式との關連を考察している點は、たいへんおもしろい。關帝廟や眞武廟、龍王廟もわりに多く、眞武廟については一八廟もあげられている。胡都以下はそれぞれ一廟である。これらの記

録を見るにつけ、かつてはいかに多くの神々が中國民衆を取り巻いていたかが分かる。本書は「物」の調査が主體であるが、「物」を通して人々の精神生活がほの見えるところにある。宗教調査の意義があろう。

三 附 帶 事 項

九六年の夏、本書の書評依頼を承諾したとき、著者から、たまたまハンセン氏から著者宛に來た手紙(九六年六月一日附け)を見せてもらった。VALERIE HANSEN氏はYale大學の助教授で、*Changing Gods in Medieval China, 1127—1276*という著書があり(Princeton University Press から一九九〇年に出版)、目下は北京に留學中である。

英文版の本書を見て、宣化に行つて來たという。それによれば、鐘樓と鼓樓はまだあるが上にはのぼれない、三つのイスラム寺院ができてゐるが、活動しているのは一カ所で、休日の集會には三百家族が集まり、金曜日には二十家族が來る、カトリック教會もあつて活動している、立化寺の遼塔はそのままであるが、境内は軍隊の用地になつてい

る、九天廟には數家族が住んでいる、路上にあった五道廟はすべて文革中に破壊された、ということである。

また、九六年一二月には、著者から李世瑜氏の「一九四七、一九四八年萬全、宣化廟宇普查之方法論」という論文のコピーを頂戴した。行政院文化建設委員會主辦、漢學研究中心承辦『寺廟與民間文化研討會論文集』所收、九五年三月出版。論題の上に「中華民國八十三年全國文藝季系列活動」とあり、臺灣の出版物である。これによれば著者は一九四六年に北平輔仁大學研究院の教授となり、李世瑜氏はその時の學生である。萬全の調査には李氏が著者の學生および助手として同行し、四七年七月一日から八月一七日まで、縣城を含む九三の農村と張家口市を調査した。宣化の調査には李氏ともう一人の學生王輔世氏が同行し、四八年七月七日から八月三〇日まで、宣化の一一五の農村と宣化舊城を調査した、という。その他、調査の具體的な状況について参考になる記述が多いが、いま詳しく紹介する餘裕はない。

ともあれ、當時の状況でこれだけの調査をしたことは、

たいへん大きな意義がある。主として一都市しか調査してないことや、細かなことでいろいろな不備がある點で不満足の感じも残るが、それらは、いわばないものねだりというもので、評者の経験から言っても、現地調査の場合、そうした方がいと分かっているも實行できないことは、じつに多いのである。評者が出した報告書についてもいろいろ言われるが、當事者の立場から言えば、たいがいはないものねだりか揚げ足とりである。現地調査の歴史は短く、實績もまだ極めて少ないから、本書のような成果が公刊されたことの意義はたいへん大きいと、重ねて言うておきたい。